The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『いえ、けっこう。わたしは自分で考えます』
Author(s)	阪本, 恭子
Citation	臨床哲学. 1999, 1, p. 117-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11940
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

『いえ、けっこう。わたしは自分で考えます』

Annegret Stopczyk 》**NEIN DANKE, ICH DENKE SELBER**《
(Rütten und Loening GmbH, Berlin 1996)

阪本恭子

表題『いえ、けっこう。わたしは自分で考えます』に示されるように、そして序文でも述べられるように、この本には「自分で考える」(Selberdenken) という「モットー」にもとづいて、如何に何を「哲学する」(Philosophieren) かが記されている。ひとがすでに考えたことを再びあれこれ「思案」(Nach-denken) するのではなく、わたしが、今こうして自分が生きている世界における体験と行為から、独自の思考と感覚を導きだすこと、それがここで描きだされる哲学である。

著者はアンネグレット・ストプチュク。多彩な職歴をもつが、現在はベルリン工科大学で経済倫理の講師をしている。哲学だけを学ぼうと大学に入り、不本意ながら物理学とゲルマニスティックを副専攻に選ぶ。職業を問われると必ず、哲学教師ではなく「哲学者」(Philosophin) と答えては延々と問答を続け、「わたしは人生について考えているのです」と言いきる彼女は、人間、旧西ドイツ市民 (Wessi)、そしてひとりの女性として、生活のさまざまな場面で哲学しようと試みる。先述の職業問答や、街頭で行われた一般のひとびととの哲学論議からは、彼女の哲学に対する真摯な態度はもちろんのこと、哲学のドイツでの位置や東西統一後のドイツ社会の現状も伺うことができて興味深い。また全編にわたって肖像が多く掲載されているが、カント、ゲーテに混じって、街頭インタビューの様子、著者自身や子供との写真などもさりげなく挿入されており、異色の、まさに著者独自の哲学書となっている。

デューラーを愛し、画家志望だった著者を哲学へと向かわせたのは、「世界と精神を規則にしたがって秩序づける」と「約束した」デカルトである。著者16歳、世界的な反ベトナム戦争の学生運動の中、ドイツも混迷していた1960年代終わりのころである。心の平穏を渇望、一気にデカルトを読破した少女はしかしやがて自分が、直面する現実をいっそう混乱したものとして認識していくことに気づく。ところがデカルトはその答えを記してはくれていない。この一連の体験は「最終的に本を閉じ」、やがて「体験が全ての母である」という信念を著者に抱かせる。哲学への憧憬と懐疑。そこには当時、学問としての哲学から乖離して社会学を樹立したアドルノやホルクハイマーの影響が伺えよう。と

は言え、「非学問的に哲学する」哲学者をつねに自任する著者が、哲学を学問分野のひとつだけではなく「人生のあらゆる連関を捉える方法」として追求した、「若きフランスの哲学者」デカルトから受けとったものは大きい。

以後、「否定するにとどまらず、あらゆる現実に意義を見いだす」ヘーゲルに傾倒し、「人類の未来を、平和の楽園と各人の自由の中に見定めた」マルクスに熱中したこと、「さまざまな『観点』をもち、感覚可能な身体性を自分で形成する可能性を人間に認めた」カントに深い感銘を受け、そして最終的には、自身の出産体験にももとづいた「身体哲学」へと発展させたことが説明される。著者の職歴と同じく、じつに多彩な哲学者が紹介されるわけだが、本書の特徴は、これらの哲学者たちの思想が、当時の著者の体験とともに語られることである。あるいは初めに著者の体験があって、それを理解しようとして求め、出会った哲学者たちを、著者なりに解釈したとも言えるだろう。したがっていわゆる辞典的な思想案内とはなっていない。しかし決して独善的な認識が列挙されているのではなく、哲学体験とも呼ぶべき著者独自の哲学が語りつくされるのである。

「哲学者であることと哲学教師であることには、いかなる矛盾があってもならない」とも言う著者にとってはつまり、考えること、哲学することは、生きることとは切り離しえないものである。哲学教師あるいは哲学の学生として過去のどんな哲学者から学ぶにせよ、如何に何を哲学するかは、ひとりひとりが生きることと同じく、まさにひとりひとりの手にかかっているというわけだ。そして本書の読者は、著者が如何に考え、生きてきたかの試行錯誤の跡をたどる中で、著者に倣って、「いえ、けっこう。わたしは自分で考えます」と語り始めるかもしれない。しかしわれわれがそうして新たに哲学しうることこそ、この本の目指すところであり、最大の効用なのかもしれない。